

ケニア・モンバサの 特別支援学級での実践



～環境条件に応じた支援を探して～

都立北特別支援学校
阪本真樹子(20-1ケニア)

発表概要



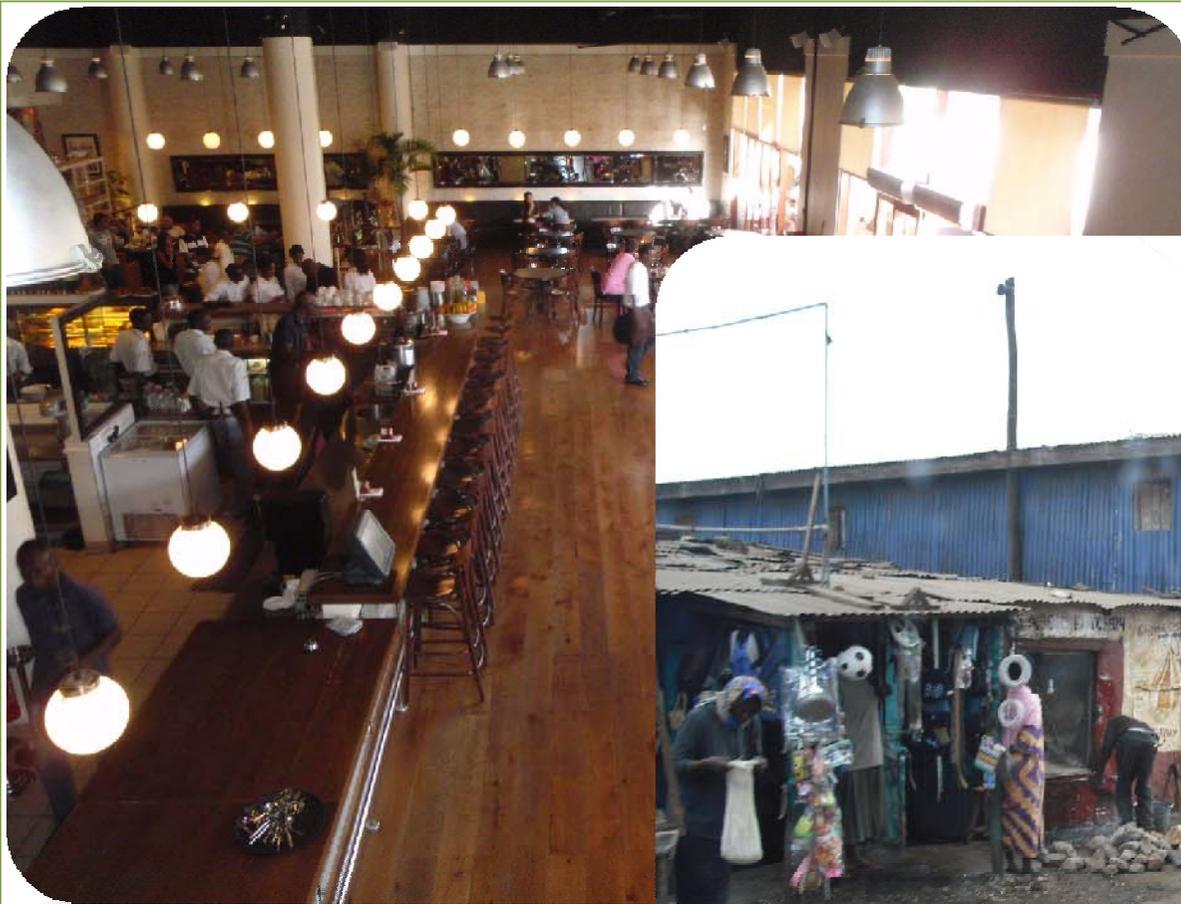
- ケニアって、どんな国？
- ケニアの特別支援教育
- セントピーターズロック校の紹介
- 私のもがき
- 最後に～今振り返って～



イギリスから独立後
東アフリカの
経済の中心として、
発展をとげてきた国。

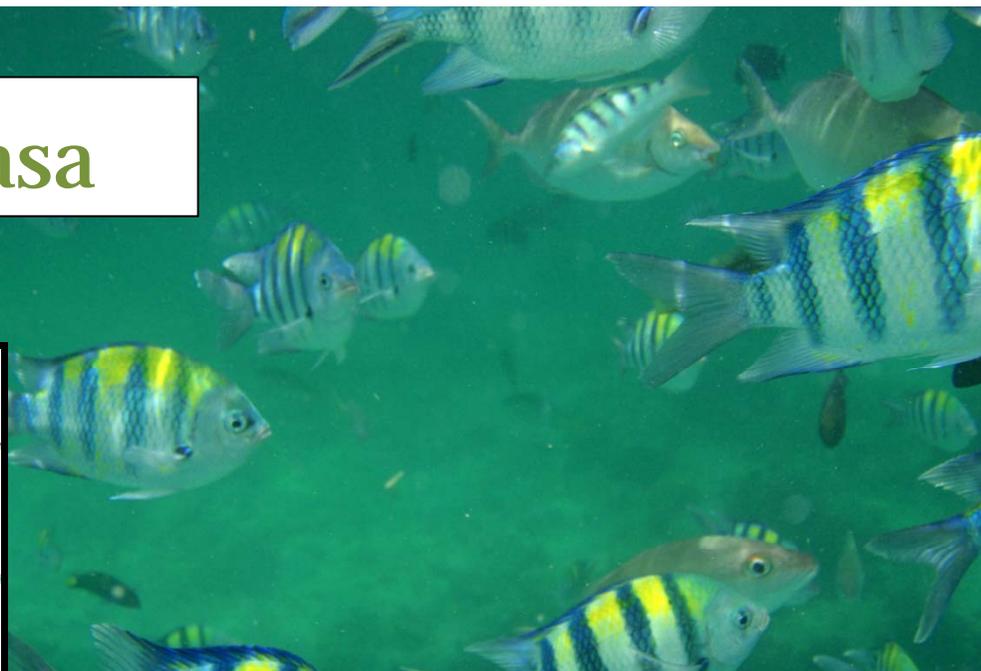
47部族の
文化・言葉が大切にされ、
互いに混じり合いながら
つくられてきた国。





一方で、想像を絶する貧富の差がある。

私の暮らしたMombasa



Ⅱ. ケニアの特別支援教育



《教育制度》

- プライマリー(1～8年生)の学費無償化がすすみ、セカンダリー(1～3年生)の無償化が始まった。
- 8年生、3年生でのケニア共通テストの結果で、進学できる学校が政府から指定される。
- プライマリーでは希望者の爆発的な増加をへたが、寄宿舎代などの負担から、セカンダリー進学には大きな壁がある。
- 貧困のループから抜け出す、ほぼ唯一の道が学歴。

《特別支援分野》

- 「障がい者は隠すべき存在」という意識が、まだ強い(特に農村部)。
- 聴覚障がい者・身体障がい者に対しては、その他の障がい種別に比べ、理解がある。



- 公立・私立の特別支援学校と学級がある。
都市部には複数あるが、ケニア全土でも数は限られているようだ。ただし、ろう学校については、認知度も生徒数も他より多い。
- 特別支援教育の認知度は低く、彼らの生活の質を保つことがとても難しい。
- 経済的な理由（兄弟の学費優先など）、通学の困難性などから、未就学のケースも多々ある。

Ⅲ. St. Peter 's the Rock ～私の配属先紹介～



《St. Peter's the Rock校》

- プライマリー部門、ナーサリー部門、 特別支援部門の3つをもつ小さな私立学校

①通常教育クラス

②統合教育を理想とする教科学習クラス

③幼児クラス

④特別支援クラス

- 児童・生徒数：
約80名



《 Special Unit 》

- 対象児童・生徒：当時は18～24名。
- 年齢：6～23歳。大多数は10代前半 までが占める。

- 主障がい：ダウン症、
自閉症、てんかん、
知的障がい、
脳性まひ、
猫鳴き症候群など

- クラス教員：1～3名
(ボランティア含む)



《 ボランティア要請内容》

- 3代目JOCV、1代目養護隊員として活動。同僚とともにスペシャルユニットで、読み書き、歌、スピーチ、日常生活の指導を担当する。また、スタッフの指導技術の改善を図る。

①知的ハンディキャップの児童の支援

②授業(特にビーズ作成などの職業訓練)実施

③イベント参加の補佐

④学習教材の作成(例えば英語のポスター)

IV. 私のもがき ～‘今ここで’を探して～



- 個々に応じた学習の促進
(学習環境の整備、学習内容の充実)
- プレボケーショナル・トレーニングの充実
- ケニア特別支援教育に関する発信

《抵抗を感じたこと・困難だったこと》

- 罰を多用しながら保つ一斉教授のやり方
 - コミュニケーション
 - 人の激しい入れ替わり
 - 限定的な情報
- etc...



思うこと、気づいたこと全部は絶対にできない。

「今ここで必要な形、受け入れてもらえる形で、
個に応じた学習を私なりに進めよう。」



1) 時間割の整理: グループ活動時間の確保

例: 赴任9ヶ月後の修正時間割

* O:スピーチ、W:書く活動、G:グループワーク

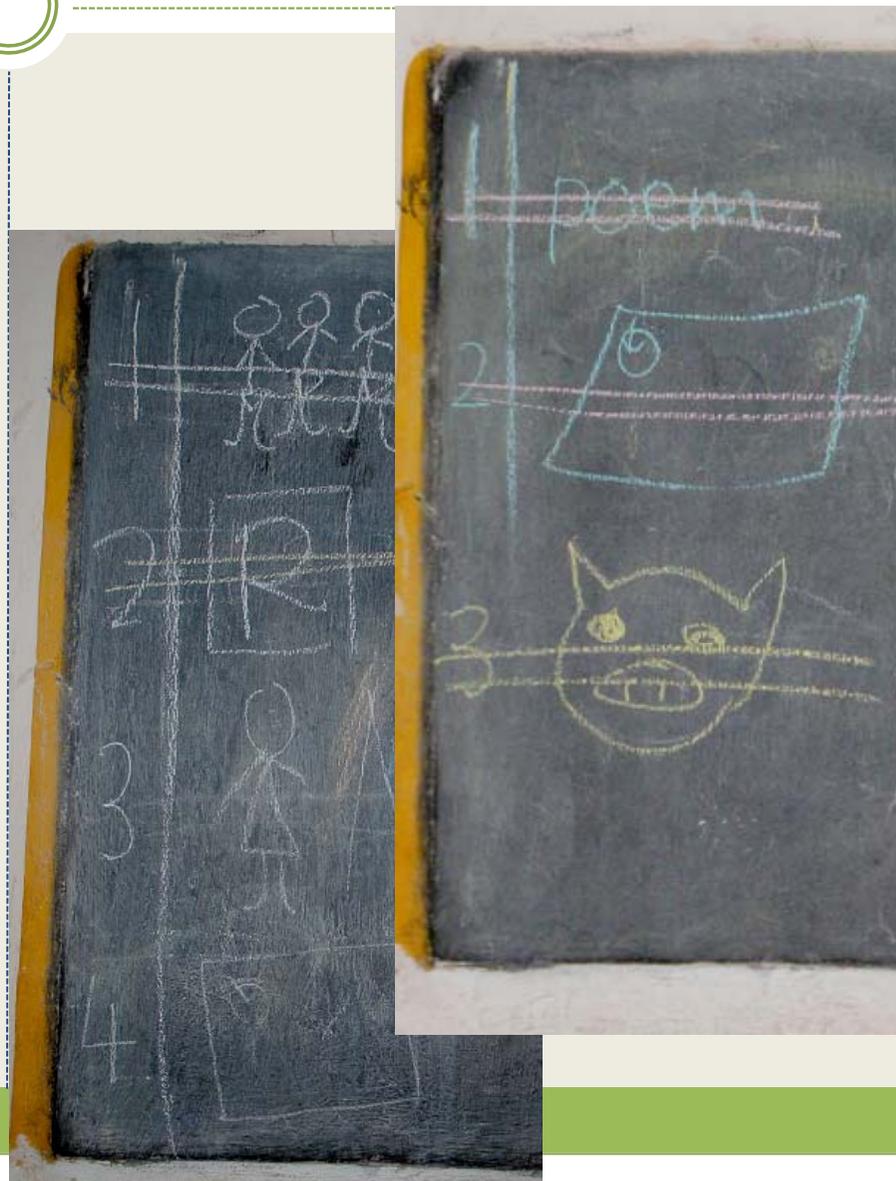
	8:00-	8:30-		9:30-		10:30-	11:15-		14:00-
月	朝礼	クラス	ト イ レ タ イ ム	G(C) / チャート	ブ レ イ ク タ イ ム	数O	G(AB)	ラ ン チ タ イ ム	ビーズ
火	フ リ ー プ レ イ	クラス		G(C) / チャート		読み聞 かせ	P.E		ビーズ
水		クラス		G(C) / チャート		言W	音楽		ビーズ
木		クラス		クラス		言O	G(AB)		ビーズ
金		PPI		クラス		クラス	数W		図工

《整理の手順》

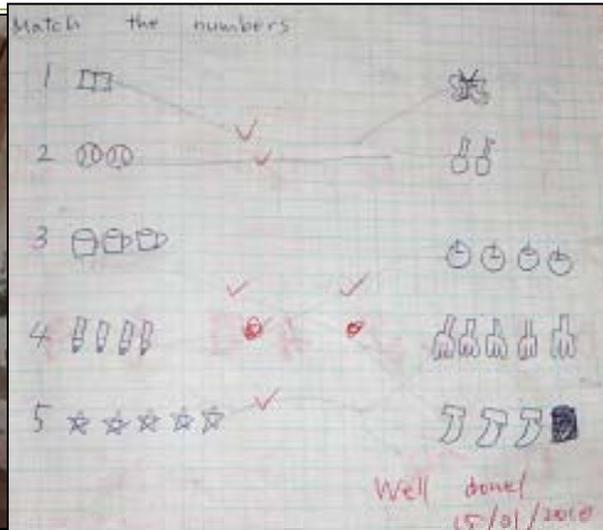
- ①グループ学習、日常生活の指導のための時間確保の必要性を話し合う。
- ②認識に応じた3つのグループに分ける。
- ③各グループ時間を少なくとも週2回は設定することを前提として、その他の授業と組み合わせる。
- ④実質のクラス運営のため、1回目のグループメンバーを生活年齢・学習態度をふまえ調整。
- ⑤学期ごとに、他クラス時間割との兼ね合いに応じた調整。

2) 視覚刺激・教材の活用

- 描画による
スケジュール提示
- トイレサインの活用
- 歌の選択時の絵の活用







3) ケニア特別支援教育に関する発信



- ビーズ商品（職業訓練として作成）の販売を通じた発信
 - ① JICAオフィスでの販売
 - ② ピースボート乗船者への働きかけ
 - ③ ふれあい祭り（日本人学校主催）への参加
- お便りの作成 ～前勤務校に向けて～
- JICA広報を介した発信（活動紹介、クリスマスカード）

《子どもの変化・スタッフの反応》



- ボランティアと子どもたちとの関係の成立
 - 罰を多用しないやりとりの成立
 - 子どもたちの積極的選択行動や発言の増加
 - 無発語自閉症児のトイレサインの活用 など
- 子どもたちの変化を、次第にスタッフと共有できることが増えた
 - 新しい取り組み受け入れ促進
 - 活動終盤には、ボランティア活動終了後の授業の流れや教材利用の継続を要望された

V. 最後に～活動を今振り返って～



子どもたちと築いた関係が一番の宝物



ご清聴ありがとうございました。